

## 中学生期における「アートと言葉」をテーマとした教科融合型学習

藤井康子（大分大学 教育学部 准教授）

### 1. 研究の背景と目的

第12回児童教育実践についての研究助成（全研究）では、大分県の津久見市立第一中学校2年生を対象に、美術科と国語科の2教科を軸とした探究的な学びの中で他教科等（理科、総合的な学習の時間）が融合した実践と『津久見色辞典』の作成による教科融合型学習の開発プログラムⅠを作成した。本研究（継続助成）の目標は、前研究の内容をふまえ、実践を通じた課題を考慮した学習内容の充実と改善、評価方法（教科融合型ルーブリック）の開発とともに、この融合型学習の中で生徒がどのような力を身に付けることが出来たか等、生徒にもたらす変化や効果について明らかにすることである。

### 2. 研究方法

本研究では、前研究と同じ中学校で90名、3クラス（現3年生、開始時は91名、4クラス）の生徒を対象に、1年生の2学期から2年生の3学期までの1年半、美術科を主軸として国語科、理科、英語科、総合的な学習の時間でのふるさと学習を横断・融合させた新たな教科融合型学習プログラムⅡを開発し、生徒に適用した効果を捉えることを目的とした。生徒の学びの質的な変容を捉えるため、実験授業の参与観察と生徒の作品や鑑賞文等のパフォーマンス課題、ワークシート、振り返りシート、美事典等の分析を行った。

### 3. 成果と考察

(1) **アートと言葉をテーマとした教科融合型学習開発プログラムⅡの作成**：前研究に引き続き「色」を各教科が繋がる共通項とし、美術科の美的体験を組み入れた学習を開発した。開発プログラムⅠに加え、ふるさとの魅力を国内外に発信するために英語科を加えた学びのポートフォリオ『津久見“美”事典』『津久見“美”事典～作文・作品集～』を作成した。

(2) **生徒の学びに対する意識の変化**：実験授業の後に行った生徒の自己評価ルーブリックでは、各授業においてS評価も見られるなど生徒の自己評価が高いという結果が示された。生徒が生まれ育った土地（ふるさと）の魅力を新たな視点から理解したことで、その土地に対する愛着が深まったことが分かる記述が見られた。また、各教科のより専門的な内容への興味・関心が高まったことが分かる記述も見られた。「アートと言葉」の学習は、美術科の感じる心と創造力、理科の科学的な思考力・判断力・表現力、国語科や英語科の思いや考えを言語化する力を有機的に結びつけたといえる。授業の中での様々な学習経験が生徒の自己効力感を高め、学ぶ楽しさの実感や、ふるさとの理解の深まりが生徒の自己肯定感を高めることに繋がった。この実践を受ける前と比較して、生徒たちは授業での自己規律、努力、挑戦する姿がみられるようになり、通常の授業においてもプラスの効果がみられた。

(3) **教職員の意識の変化**：異なる専門の教師による互見授業と教材研究が、教師間に「つながり」を生み出した。教員研修の一環として位置付けた実験授業の分析や協働的な学び合いにより、学校全体で取り組む授業改善へとつながった。教科融合型学習の教材研究を通して、教師たちの間で教科や学年を越えた自然なコミュニケーションが生まれ、互いに刺激し合い、より高め合う関係が生まれている。教科の「融合」が、教職員に新たな学びの機会をもたらした。

(4) **美術の感動体験が生み出す実感をともなった学びの構築**：実物を用いた美術の感動体験を各教科の学習に取り入れて「融合」したことで、美的体験とともに「感性を働かせながら」多面的な感じ方や見方・考え方を構築する実感をともなった学びの場を実現することができた。生徒たちは授業の中で、美との対話のみならず、自らが生まれ育った故郷との対話、自分自身の学習履歴との対話を行った。これらは、教室空間や教科書教材だけでは生み出しにくい多様な対話であり、他教科には真似のできない美術科の魅力である。教科の融合は、教科横断的であることに加え、各教科がより積極的に関与し合うため、生徒の中で教科の認識が深まり、物事を俯瞰的にみる多面的な見方・考え方を養うことが示唆された。このような深い学びが、生徒の知識面や思考力・判断力等の向上に繋がる「学習意欲の向上」に良い影響をもたらしたと考察する。

### 4. 今後の課題

美的体験を伴う「アートと言葉」の学習が生徒にもたらした効果をより詳細に明らかにしていくこと、教科の融合によるメリットを生かしながら学習内容と指導方法、教科融合ルーブリック等の評価方法の改善に取り組むことである。学校現場の協力を得て、本研究の成果物の一つである『津久見“美”事典』をもとに教育実践と検証の積み重ねに取り組み、学習の質を高めていく。加えて、美術科以外の他の教科を主とする他教科との融合型学習の新たな展開も期待している。

共同研究者：花坂 歩（大分大学）、佐藤 収（大分県教育委員会・大分県立美術館）、畑山 未央（東京家政大学）